

ブライトン物語

中村アキヤ

「あなた、今年はブライトンへは何日に出るの？」

妻のめぐみがワイシャツにアイロンをかけながら尋ねた。

「毎年十一月の行楽のシーズンに決まった様にヨーロッパに行けるなんて、いい会社ね？」

「馬鹿言え。遊びに行くんじゃないんだから…。行く先はいつも同じ、毎日が雨の港町だよ。日本と違ってイギリスの秋は暗くて寒いんだ」

新聞から目を離さずに秋山義男は答えた。

「イギリスはそうでもほかの国は雨ばかりじゃないでしょ？イタリアだってスペインだって素敵な写真を撮ってくるじゃないの？私もまた行ってみたいなあ」シャツをたたみながらめぐみは呟やいた。

「ブライトンでどんなところなんだろう？」

秋山は読み掛けの新聞を置いて、めぐみの質問に答えた。

「イギリス南東部のイーストサセックスという州にある古い街なんだよ。ドーバー海峡に面しているので対岸はフランスさ。タバコの匂いがプンプンするガタボコ列車に乗ってゆけるロンドンから最も近い保養地なんだ」

そこは、海辺に沿って走るキングスロードに沿って大小のホテルが並び、砂浜のビーチには二本の古い栈橋（ピア）が海に突き出て、日本の熱海に似た霧囲気の街である。初夏から秋にかけては日光を求めてイギリス王室が滞在し、地方競馬を楽しむような避暑地である。

小振りながらロイヤル・パビリオンや美術館、植物園などを備え、駅周辺からビーチまでの落ち着いた街並みには、バー、レストラン、ナイトクラブ、ゲームセンターやアンティークの店などが軒を連ねている。

「あら、熱海に似ているならちよつと行ってみたいくなるなあ」とめぐみ。

「でもさっき言っただろう？ 冷たい雨交じりの海風に吹かれて歩くのは叶わんよ、全く」

秋から冬にかけてのオフシーズンは、便利な立地と多くの宿泊設備を利用し

て、世界捕鯨会議とかオペックの総会とか大きな集会在開催される。

十一月後半、当地で全英の農薬学会が行われる時は、世界中の農薬会社や、農業機械メーカーおよび飼料や肥料会社などの関連会社の技術陣が集まり、研究発表の行われる大講堂の周囲の小部屋で無数の商談やら情報交換の会が持たれる。

農業関連については春から秋までの現地での大規模圃場試験の結果や、各研究機関で並行して実施される対象物質の作用性やら、毒性やらの研究結果をまとめて学会で発表するセッションと、共同研究会社とそれぞれのデータを交換して次年度の試験計画を相談する業務セッションに分かれる。

「野球でいえばストリーグのようなものさ」

「それで毎年決まった時期に打ち合わせがあるのね？」

「農薬といってもいろいろあって、雑草を駆除する除草剤、害虫を殺す殺虫剤、病原菌を除く殺菌剤に分類されるんだ。除草剤ではアメリカ大陸のとうもろこし・綿花、大豆、小麦などが主な市場になる。ヨーロッパ各国では主要生産物の葡萄や、馬鈴薯の殺菌剤が、アフリカ諸国で毎年発生する大型バッタなどに対する殺虫剤が主要なターゲットになるんだ」

「全部をまとめて農薬というのね？ あなたが庭の草むしりに使うのは除草剤ね？」

「野菜のアブラムシに使うのは殺虫剤だよ」

「フーン、研究所の農薬研究室ではかなり大勢の研究員が働いているわね？」

「うん、まず新しい化合物を探すのが大変さ。効果があっても、薬剤そのものの毒性が一番大事で、それ以外に製造コスト、環境に対する影響などが主要なチェックポイントになり、膨大な研究開発作業があるんだ」

秋山はめぐみが夫の仕事をどの程度くらい理解しているか分からないが、少し専門的な話してみた。

「例えば水稻の除草剤についていえば、水稻への安全性は勿論だが、他の穀物への安全性が問題になるんだ。水田の水をかけたトマトが枯れてしまった事例もある。

対象薬剤の急性毒性や、ラットを用いた二年間の慢性毒性、発がん性、催奇

毒性とか、水に溶けた場合の水中での分解物の毒性、魚類への影響などを調べる必要があるんだ」

「水ばかりではないんでしょ？」

「うん、土壌への移行性などの環境への影響をしらべるのも大事さ。それから化合物の製造法と製造コストや、他社にまねされないように物質特許と製造法の特許を取得するなど膨大な資料が必要になるんだ。長い基礎探索試験を経て有望な新規物質が発見されてから、圃場試験には少なくとも四年、慢性毒性試験はラット、マウスを用いた生涯試験に二年、全ての試験に合格して登録申請から受理される迄数年はかかるのさ。一か国の登録を取得するだけでも膨大な費用がかかるので、開発対象を数か国に広げるには海外他社との共同開発が必須なんだ」

「大変な仕事ね。新しい薬を一つ出すために相当な研究費と時間が必要なのね。研究所の人に頑張ってもらわなくちゃね？」

研究所出身の秋山は農業や生物学の専門ではないが、これらの基礎知識を一応は理解し、多少の語学の才能もあって、自社開発新剤の市場開発と共同研究の相手会社の選択を兼ねてこのブライトン会議に結果として八年間連続して出席した。

出席に際しては、往復の途上、提携先のヨーロッパの会社や研究所を訪問し見聞を深めると同時に、場合によっては海外出張の機会の少ない研究所の若手を帯同することを心掛けていた。

十一月ともなればこの地方は、たとえ雨が降らなくても終日どんよりと曇り、街の表情は夏のそれとは様変わりになる。厚手の背広とオーバーコートの学者や会社員が集まり、避暑地の表情は全く感ぜられない。

学会事務局のあるメトロポールホテルは立派な講演会場を有し、いくつかの小ホールやスタジオは、種々の会社のレセプションや打ち合わせに用いられる。隣接するグランドホテル、ベッドフォードホテル、オールドシップホテルも同様でこの期間はどこも満員盛況である。

秋山は、出発間際になってブライトンのホテルの予約をしていないことに気が付き、M商事の本社にブライトンのホテルの予約を頼んだ。

「秋山部長、他になにか大きな催しがあるのですかね？どこのホテルも満員で、

最初の二日間はやっととれたのですが、市街地からやや離れた小さなホテルです。秋山部長には申し訳ありませんが今回だけは我慢して下さい。三日目からはベッドフォードホテルがとれました」

「サー、アーユー、アローン？」とタクシーの運転手に聞かれた。

「ミスターアキヤマ、ユー、アローン？」大柄なホテルのカウンター嬢にも聞かれた。

そのホテルは町はずれの海に面したこじんまりした建物だった。チェックインして案内された部屋は道路を隔てて海に面した大きな鏡付きの化粧台のある、やたらにカーテンの多い部屋だった。

気が付けばダブルベッドには何と天蓋があり、浴槽はハート型のバスタブで一面に花が浮かんでいた。

翌朝、「秋山さん、それはラブホテルですよ。学会で通常のホテルは満杯で本社の担当はやむなくそんなホテルを予約したのでしよう」

ロンドンM商事の安田部長が解説した。

「御一人で宿泊する客には然るべき女性を呼んでくれますよ」

二晩目の夕食はM商事のおごりで近所のレストランで済ませた、ほろ酔い気味の秋山は十時近くにホテルに帰ると、カウンターの昨夜とは違うやや小柄の女性がにこやかに迎えてくれた。

「もしよかったら、このホテルの内部を案内しましょうか」といって、三階建ての施設を案内してくれた。

最後に案内されたのは一階のカウンターと背中合わせにある彼女の居室で、事務室の隣にこじんまりとしたリビングと大きな冷蔵庫のあるキッチンがあり、「何か飲みましょうか」と問われ二人でジントニックを飲んだ。

褐色がかかった金髪の彼女は問わず語りにも身の上話を始めた。アイルランドの出身で三年前からこのホテルを経営することになった由、青い大きな目が印象的だった。

「ここがシャワールーム、ここがベッドルーム」と案内して彼女は、「私はウイドウなの」と言っってウインクするではないか。

「会社の費用で学会に来て、こんなことになっていいのだろうか？」

秋山は瞬間的にそう思ったが、酔いも手伝ってすべては成り行きに任せた。

秋山は「ワオー、イエース。イツツ イナフ！」という彼女の声がいっつまで

も耳に残り、そして金髪の女性はすべての体毛が金髪であることを学んだ。

翌朝小雨について到着した会場のメトロポールホテルのロビーは混んでいた。

「おや、秋山さん久しぶり。こちらにうちの会社の控室があるのでどうぞ」とD社のイギリス研究所のヘイストン博士が声をかけてくれた。

控室では数名のD社の社員が一杯飲みながらこれからの打ち合わせスケジュールの検討中であった。

「ああ、秋山さん。こちらにどうぞ。おやこの雨の中、傘はお持ちじゃないですか？」

秋山はおもむろにそのころ日本ではやりだした折り畳みの携帯傘を取り出し、パチンと広げて見せた。

「えっ、すごいものを持つてますね。日本のテクノロジーは素晴らしい。価格はどのくらいするのですか？ちよつと貸してください」

大柄なヘイストン博士が傘を広げようとしたがうまくいかない。

「この傘を広げるのも畳むのもコツがあるので」

秋山が説明した。

「日本と違ってイギリスの雨は冷たくてかつ激しいでしょう？だから当地では頑丈な傘が必要で、こんなファンシーな傘は使えません。皆さんは傘を杖替わりに使うけど多少の雨では畳むのが不便だからって傘を頻繁には広げないでしょう？」

「傘は滅多に使わないかわりに、我々は上等な厚手のコートを着ているんです」

「使わない大きな傘と乾きにくい厚手のコートでは素早く行動できないですよ？ ゆっくり活動するのをジェントルマンライクといたうんですかね？ そういえばイギリスの国鉄はジェントルマンらしくいつも遅れますね？」

「いや、あれは労働組合が…」

「日本の国鉄にも労働組合がありますよ？英国の労組の幹部はジェントルマンで対応が遅いのですかね？」

答えに窮した博士は話題を変えた。

「さて、少し早いけど昼めしても一緒にいかがですか？」

案内されたのは海鮮料理で有名なホイーラーズというレストランである。

この店はロンドンのセント・ジエイムスにもあり、名前のとおり緑の外壁に木製の車輪（ホイール）が飾ってある。

「秋山さん、ここではもちろんドーバーソールでいいですよね？ちよつと焦げ目をつけた焼き具合にバターソースをかけたやつですよ。白ワインはシャブリでいいですよ？この時期この店は大繁盛でだいぶ前から予約してあるので」

お目当ての料理は、ブライトンの目の前のドーバー海峡でとれた長さ三十センチ、幅十五センチの特大肉厚の舌平目である。

実は秋山は前の晩も同じ店でM商事の招待を受けたのだった。あまり食べたので腋の下から鱭がでてこないか心配になったほどである。

この学会中は毎晩どこかの大手会社がパーティを主宰し、招待状がなくても歓迎された。

ベッドフォードホテルで開催されるフランスのR社のパーティが一番の人氣で、毎年ボージョレイワインの解禁日の十一月の第三木曜日と開催日が決まっていた。

会場に入ると大型のワイングラスを渡され、会場数か所に設置されている樽から自由に何杯でもお代わりできる仕組みである。おつまみには十数種類のチーズやハムが並べられ、学会にはそぐわない肩丸出しのカクテルドレスの若いフランス女性がお皿に盛ってくれる。彼女らはR社本社の受付嬢で、業界各社の渉外担当とは顔見知りの仲だそうである。

あまりの盛況でホテルの床が落ちる恐れがあるとの理由でボージョレイパーティが中止になったことがあるが、あとで聞けば、その年は天候が悪く主催社の農業関連事業の業績が悪く財務上の理由で中止になった由。

後年このホテルで爆発騒ぎが起きた。サッチャー首相の訪問を狙ってテロがあつたらしい。

秋山はこのパーティで日本人の業界の知り合いとはよく顔を合わせた。

「秋山さん、私はブライトンに来たのは初めてなので土地勘が無く、昼飯はどこで摂るのがいいのかいつも困っています。昨日は海岸の店でフィッシュアンドチップスを食べたのですが、あまりパットしませんでした」

機会あるたびに秋山はそんな彼らに昼飯を御馳走した。初めての外国でいろいろな情報を教わりながら食事を奢ってもらった彼らは、えらく感激して、日

本に帰国したのち、必ずと言っていいほど「あの時のお礼に」と夕食に招待してくれるのだった。

秋山にとって、比較的安価な外国の昼食と引き換えに日本での接待を受けるのは経済的に魅力があった。

ある晩、パーティーのない夜に退屈していた。聞けば近所に会員制のカジノがあるというので、ホテルのコンセルジュの紹介状を貰って覗いてみた。

会員制なので一般のフリーの客はお断りなのだ。イギリスでは格式を重んじ、どんなところでも会員制が普及している。

古い建物の地下への階段を降りると重々しいドアがあり、小窓から紹介状をみせるとドアが静かに開いた。室内は落ち着いた雰囲気で、ラスベガスの賭博場のような派手な喧噪はない。

バーのほかはルーレットとカード卓が各二台と数台のスロットマシンがあるだけの、小暗い賭場の客はみな常連のようだ。買い物籠を持った太ったおばさんの横には、ハンチングの赤ひげのおじさんが一杯やりながら勝負しているといった風情である。

カウンターで紹介状とパスポートを提示し入会手続きをし、一週間有効な会員証を交付してもらった。書式が整えば本部に連絡して、三か月後にパーマネントの会員になれるという。その後秋山は数年の間自由に出入りすることになった。

秋山の初めてのカジノの経験は韓国のウォーカーヒルだった。当時はパスポートを持った外国人だけが入場可能で、観光ガイドのおばさんは何時間でも入り口で待っていてくれた。

カーテンで仕切られた部屋から大声が聞こえ、札束を手にした日本人グループに入れてもらおうとしたら「兄さん、どこの組のもんだい？」ときかれ、すぐに日本のヤクザの仲間だけの遊びとわかった。

モナコでは、宿舎のパレロワイヤルホテルから道路の向かいのカジノの建物まで地下道が通じていて人目に触れずにカジノにゆける。宮殿のような豪華な内部では、壁も天井も潇洒な装飾で飾られ、客もネクタイは必須。

優雅な雰囲気でラスベガスのそのような喧噪はない。イブニングドレスを纏った美人がにこやかに迎えてくれる。プレイ中はシャンペン飲み放題とはい

え、掛金はミニмум三十ドルという表札が目につき、当時一ドル三百円の為替レートの世界では秋山のような庶民には縁遠い場所であった。

パナマの賭場の主な客筋は、パナマ運河の通過待ちの船員が多く、モナコとは正反対の荒っぽい独特の雰囲気があった。手ぬぐいを頭に巻いた日焼けした髭面、縞柄のシャツ、入れ墨をした太腕、まるで海賊の国へまぎれ込んだみたいだ。彼らは缶ビールの飲み口に塩を盛り、グビグビやりながら大声で、早口のスペイン語をしゃべっている。秋山は間違えて他人のチップに手をかけて「セニョール、モメント！」といって腕をつかまれた時はゾットした。

秋山は、ラスベガスには数回訪れたことがあるが、ブラックジャックのディーラーは時代とともに徐々に変わってきたことに気が付いた。

初めは黒人のハーフの女性、次いで陽気なラテン系の姐ちゃん、物静かな東欧系の人、ごく最近では韓国系の女性という具合だ。

彼女らはいろいろしゃべりながら繊細な指で手際よくカードを捌く。会話にもついてゆけない上、なんだかか誤魔化されそうで、秋山はそれを敬遠してしゃべらなくても済むスロットマシンやルーレットで楽しむことにしていた。

秋山はつましく掛け金十セントコインの機械の前に座る。

隣の席のカウボーイハットのおじさんは、街中ではあまり見かけない直径四センチほどの一ドルコインで遊んでいる。当たればガチャガチャと大型コインが出てくる壮観が楽しめるが、三分もしないうちに手持ちのコインをすつてしまった様子。

秋山のそれは、一度にコインを三枚入れて三面で遊ぶ機械だ。しばらくして手持ちの残金が少なくなってもう駄目だと観念した瞬間、画面に⑦という数字が並ぶと同時に頭上でサイレンが鳴り、ライトが点滅した。スイートスポットに当たったのだ。

十セントコインがジャラジャラと際限なく出てきて、受け皿から溢れんばかりだ。人だかりがして「ビューティフル！」「元手はいくら賭けた？」と口々に聞かれ、なかには握手してくれた人もいた。

大きなコーラ用の紙コップ一杯分のコインをチップに替え、勢い込んでルーレットにチャレンジしたがあっけなく惨敗した。

ブライトンでカジノに通うことになった秋山は、或る晩いつものように五千

円分だけ負けて玄関口まで来ると、顔見知りのアメリカ人が二人、受付のブラックスーツのクラークと押し問答をしている。

会員同伴でないので入場を拒否されているのだ。ドアの内部から出てきた秋山を見て

「おー、秋山さん、貴方はなんで入れたの？」

聞かれた秋山は得意げに会員証をみせた。

「秋山さん、頼むからもう一度一緒に入ってくれませんか？」

といわれ、渋々再入場した。

先ほどギブアップしたルーレット台に座ると

「ハイ！ユーカムアゲン？」

不思議そうな顔の女性のディーラーに言われ、

「イエス、ジャスト ツーシー ユア ラブリーフェイス アゲン」

つたないお世辞に彼女はまんざらではない顔つきでプレイを続けた。

秋山は二人のアメリカ人に付き合っ、仕方なく、もう五千円遊ぶことになったが、あまり気乗りがしなかったの、いい加減にチップを置いていた。

なんとその時に限ってルーレットで大当たりし、一時間も経たないうちに日本円で七十万円くらい儲かった。

「今日に限って大儲けしたよ」帰り際に秋山がお礼を言った。

「ラブリー」というのが彼女の返事だった。

秋山は現金を持ち帰ると日本で換金時になにか言われるかもしれないと思、めぐみのために久しぶりに高価なお土産を買おうと思った

翌日の午後、繁華街の宝飾店で店を覗いたところ、中年の店員に

「ウエルカム、サー。どんなアクセサリーをお探しですか？」と聞かれた。

「ブローチとかでなく、なにか金のネックレスを見せてください」。

これまでの外国出張のお土産といえば、決まってチョコレートやチーズなどの食べ物や安物のネッカチーフ、手袋などであった。パリで買ったネッカチーフの柄はいつも妻のめぐみのお好みに会わず

「あなたたつてまるでセンスがないのね」と馬鹿にされるのがオチで、一度くらいは「素晴らしいお土産を有難う」を言ってもらいたかった。

「ベリー ウエル サー。奥様用ですか？それとも娘さん用で？どうぞゆつくりと御覧ください。ところでお支払いはビザで？それともマスターカードで？」

「スターリングポンドの現金で」

「それは素晴らしい。手間がかからなくて助かります」

白い手袋の手で出された首飾りは短かめの金のネックレスのチェーンと金を糸を縫ったズシリと重量感はあるが、日本で見たものと比べて、思ったほどは艶がない首飾りだった。

「もつと輝いているのはいりませんか？これらは純度が低いのでは？十八金のものはありませんか？」

「ソリー、サー。イギリスでは法律で十四金が最高純度でこれ以上のものはありません。女王陛下もこの仕様です」

秋山は我が家の女王陛下は満足するかどうかかわからないがそれを買いは求めた。

帰国後、

「こんな長くて重たいネックレスは首が折れちゃうわ。これを着けてどこに行けばいいの？これに合う服もないし…」

「喜ぶ筈のめぐみに言われて、秋山は慥然としてこう言わざるを得なかった。

「そんなら銀座のホステスにあげちゃうぞ！」

しばらくして

「秋山さんは海外出張先でのギャンブルで大儲けし、黄金の首飾りを銀座のママにプレゼントした」という噂が業界に飛び交った。 (7973字)